

昭和三十九年三月

淡江書法の履歴

淡江会有志

淡江書法の
発端

「習字法改
善」の建議

帝国書道会
の結成

中国書道の
教育法

淡江書法の
誕生

学生書道会
の結成

淡江社中

日本には、書家が多いのに国民全体の字は、下手であるが、中国には書家といわれるものは少いが、一般に字は上手である。この課題の解明のために「書法」の研究に入られたのが、先師乾淡江先生であった。

先生は、中国のように書法を確立させることによって、書を一般のものとし所謂流派のわずらわしさを除き、簡明な書法を国民の常識とすることを念願された。

そのため、書法の改善を主張され、明治四十四年五月、「習字法の改善を望む」建議案を提出、その後再参同案を建議された。大正十年、中橋文相の毛筆廢止論には強い反対運動を組織し、また、第一次世界大戦後の平和記念東京博覧会開催に際して、画壇、書壇の意見不一致から議論喧争を極めた折、先生は、主張される学芸としての書の立場から帝国書道会を結成、これを統一された。これが書道界初めての広汎な規模の結成であったが、博覧会後援の目的を達したので同会は間もなく解散されたが、これが後の日本書道作振会設立の契機となったのであった。

淡江先生は、日清、日露両役にわたり、特別任務を帯びて中国で活躍された志士で、中国語に精通されて居り、中国に於ける書法教育の実際を見聞され、中国の書法教育が何を指導しようとしているのかを、つぶさに検討し、書法の本質を正確に伝えるには、如何なる方法によるべきかを研究、先生独自の教授法を考案された。これが淡江書法の誕生である。

明治三十九年帰国された先生は、医を棄てて書家とられた。そして、書法の一般化の為に書法の教授を初められたのである。先生の門下に、政界、財界、医学界のほか陸海軍の軍人の多いのは、斯うした関係からであった。又、当時、交詢社の書法の講師をされていたので、更に、朝野の名士が淡江門下に加えられることになり、またこうした関係から慶応義塾とのつながりも密接になり、塾生で、淡江門下に加わるものが次第にふえ、大正十年、慶応義塾書道会の結成となったのであった。

この様な機縁が、今から四十数年前に、学生の書道クラブを結成させたのである。学生書道会の嚆矢ともいえよう。欧米文化の風潮が盛んな、しかも書法は一般には、すこぶる衰退していた時代に、慶応大学内に書法の研究会が出来たのも、淡江先生の書法に傾けられた情熱の然らしめるところであったともいえよう。

慶応義塾書道会は、淡江社中の援助のもとに育成された。波多野承五郎氏、門野幾之進氏、駿子夫人、箕浦勝人氏、鎌田栄吉氏、林毅陸氏等を挙げることが出来る。

そして、昭和三年、淡江先生が病臥されるまで、三田萬来舎の日本間が稽古場に当てられ、主唱される「書法」

玉江先生に
ついて

淡江会発足

淡江合理的
書法

「習字教育

建議案」

義塾書道展

を一人一腕をとって指導された。其の後、先生に代って夫人、玉江先生が会員の指導に当られた。

玉江先生は、己に幼少の頃より、嚴父（長淵）に漢籍並に書法を学ばれて居り、後、夫君淡江先生と共に、此の書法の完成に協力された方で、当時、東京家政学院、同専門学校（大江スミ女史）、法政大学書道会等の講師をされて居り、又、陸海軍の将校も指導されていた。

昭和初期は、復古的な思潮が抬頭しはじめた時代で、この頃から他の学校にも書道会結成の機運が現われて来た。昭和四年、淡江先生の逝去は、淡江社中を悲しませ、慶応書道会にも学内他団体との合併等の問題も起ったが会員の固い団結で困難を乗り越えることが出来た。そして、玉江先生を中心に、会の組織もすでに基礎が固っていたので、先生の死が、かえって会員を奮起させる結果となり、当時の塾書道会出身者を中心に、淡江書法の普及を目的として、三田淡江会が発足したのであった。

淡江先生は、元来、書には流派などというものはない。筆の性質に従い、腕の動きの自然に則した用筆即ち書法があるだけだ。この書法を会得した上で、先賢の遺された古碑、墨跡を学べば、自からその真随を体得することが出来るとされた。先生は、その書法について、淡江書法とか、乾流などといわれることをつとめて避けて居られた。然し、先生の遺法を纏めて、玉江先生が上梓されることになったので、この機会に、故先生を偲び「淡江合理的書法」と命名された。

これは、或いは、淡江先生の素志には添わないかもしれないが、これも歴史的に見るならば、一種の学派であり科学流の誕生といえないこともないので、淡江会員の意見も尊重し、先考の意志を明かにする意味からも、斯く名付けられた次第である。

この玉江先生著述の「淡江合理的書法」には、慶応義塾書道会の岡部仙太郎、森本英一、山田正夫、榎本俊三、調所広君等の序文があり、また、法政大学書道会代表として鷺見舜司君が序を寄せている。これらを見ても、誠に新風の満ちあふれていた感を深くする。昭和五年、故淡江先生提唱の「習字教育の改善案」は、稿を新にして、文部当局に提案するなど、玉江先生を後援して、大いに学生の気を吐いたのであった。

昭和六年、鎌田栄吉先生、林毅陸先生の御援助により、三田図書館の広間を会場に開放していただき、塾書道会展を催した。一部には、学生だけで何が出来るかという批判も受けていたのであったが、会員の努力と意気とが作品にあふれ、却々の力作揃いであった。特に森本君の「飲中八仙歌」の屏風は一風格をなしていた。また、調所君

淡江書法の
映画化

「習字法の
科学的解
説」二卷

中学校習字
帳

淡江書法を
とる学校及
団体

軍病院の稽
古

塾生の軍病
院奉仕

の「独立自尊」の聯の大幅は、美事な出来栄で、各方面から激賞され、同君に対し揮毫を依頼する三田会が出てくるなど同君は悲鳴をあげる程であった。誰れであるか失念したが、或る篆書の作品が、展覧会后、一塾員の懇望で茶室に掛けると云って持ち去られた事を記憶する。

兎に角、初めての学生書展で実に慮外の効果をあげることとなった。これは、てらいも、見せかけもない純粹な作品のもつ、気魄の然らしめた結果であったといえるが、この会員の実力を養成した淡江書法の基盤の上に立っていたことを今更の如く痛感する次第である。

昭和七年には、長江先生による「淡江書法」の映画化が企画された。一般には、未だ、教育映画などのない時代で、文化映画の濫觴期であった。此の映画は「習字法の科学的解説」二卷（三五ミリ・二一〇〇呎）で、全年八月文部省認定映画となった。之について、長江先生は、中学校用習字帖三卷を上梓、これは翌年四月に文部省検定済教科書となった。

淡江書法は、玉江、長江両先生により受けつがれ、塾書道会の指導精神でもあった。この間、慶応義塾七十五周年、福沢先生百年祭、初め例年三田祭には、常に充実した書展を催し、学内団体としての務を果した。

他方、淡江書法によって指導されていたのは、前述の東京家政学院、同専門学校、法政大学書道会で、玉江先生が担当されて居り、文化学院、法政大学高等商業部、法政大学書道会は、長江先生が講師をされていた。

又、河井道子女史の恵泉女子園は、節子先生が、昭和八年から引つづいて、淡江書法による筆法指導をされ現在に至っている。

昭和十三年、臨時東京第一陸軍病院では、支那事変の傷病兵の訓練課目として書道の教科が設けられ、長江先生を教官として招聘した。次いで、日本赤十字病院書道講師には玉江先生、演生先生、東京第一陸軍病院月島分室書道講師には節子先生と、傷兵の増加は、乾先生御一家の総動員にまで発展した。乾先生の御指導をいただく慶応書道会も何らかの形で先生を御援助することとなり、慶応書道会員の軍病院奉仕助教が始められたのであった。このことは慶応書道会の浜中達夫君が詳しく報告している。

軍病院に於ける淡江書法の教授上の成果は、恐らく乾先生の書法の指導歴に於て、一番多くの経験をされ、また多大の成果を挙げられたことを衷心より感謝するものである。

種々雑多な症状の機能傷害者、戦盲者の数、その上、傷兵の智能、教育程度の著しい違いは、更に指導上の難関

塾生と傷兵

「三越展」

傷兵の

「松屋展」

戦盲指導

戦後書道会
の再開

戦後の塾書

道会

淡江会員の
活動

二代玉江

「毛筆習字

独習書」

となり且つ個々の治療にあわせて夫々の教程を立てなければならぬので練習患者の努力もさることながら先生方の御苦勞、御苦心は、到底はかることが出来ないものであった。

その結果は昭和十六年十一月銀座三越に於ける「白衣の勇士と塾生との交歓書道展」となり、大いに傷病兵を激励したのであった。次いで翌十七年には、銀座松屋に於て第二回目の傷兵展を開いた。この展覧会では、戦盲患者の作品が世人の注意を惹いた。そして、この展覧会には、北白川大妃房子殿下と祥子殿下が御二人で御来場になり教授法並に傷兵の練習状況等について詳細な御質問があり、長時間親しく観覧されたのであった。そしてこれら傷兵の異常な進歩に対し殊のほか深い関心を寄せて居られた。これら患者の指導には、各人各様の難点があり、その難関を乗りこえさせるには、自からなる動きを発見することであった。この筆法指導の拠り所は、申すまでもなく淡江書法に徹することであった。筆と腕の自然の動きを体得させることであった。そこで、凡ゆる症状に対する淡江書法の応用が試みられた。このことは、更に、この書法の研磨となったのであった。

苦しい戦争の終了と共に、乾先生の傷兵指導も一応休止符を打ったのである。

戦後の混乱、昭和二十二年九月、玉江先生は逝去された。学徒動員で出征した塾書道会員の復員学生により、二十三年書道会の再開が計られた。再開に際し、英修道教授を会長に、千種教授を副会長に御願ひし、南九州の事業地から帰京された長江先生を中心に稽古が始められた。そして長江門下菅野まさ先生が指導を担当された。自由ヶ丘の菅野先生の御宅、下落合の長江先生の御宅と稽古場は転々したが、石黒先輩の御世話で、三田の田口さんの御宅を暫らく稽古場にする事となった。

却々に苦しい思出である。終戦直後のこととて、資材は誠に乏しく、松浦先輩の御尊父の御好意で当時入手困難の半紙を多量に原価で頒けていただき、その一部を他の学校などに、売って会の書道用具を揃える資金にしたりした。会員数の増加と共に稽古場も狭くなり、その後当光寺の庫裡を拝借する様になった。

菅野先生も御家庭の事情で稽古が出来なくなり、長江先生は、後樂園の御仕事の間合間を見ては指導に来て下さったがこの頃は節子先生、須美先生（二代玉江）を初め浅見、石黒、磯崎、山岡等の諸氏もよく来て面倒を見て下さった。そして、学生宇賀君の御母堂寿子先生もこの頃から会の指導陣に加わって下さっている。長江先生は、事業御多忙となられたので、会の相談役となり、林錦洞先生が、指導に加わって下さることとなって現在に至っている。一方、長江先生令妹須美先生が二代玉江を継がれ、淡江書法の教授をされるかたわら、「毛筆習字独習書」を上

教育映画

「書法」

二卷

東洋大学

併、これは、先代玉江先生の「淡江合理的書法」を長江先生の映画手法で、連続の写真版で解説を試みられた。いわば淡江書法の大衆版であった。

昭和三十七年、淡江書法の一般化を目的として、教育映画「書法」が発表された。これは長江先生の製作によるもので、脚本演技は二代玉江女史がされた。

本映画の企画は、乾先生御一家が、淡江先生の記念碑として残すため作られたもので、淡江会もまた多少の御手伝をさせて頂いた次第である。先考の遺法を後世に伝へるよい贈りものとして銘記するものである。

製作意図並びに宣伝が、行届かないため、現在、十四、五本程度が、教育関係、地方団体等に購入されて居るに過ぎないが、昨年十二月の末にNHK教育テレビでも上映され、各方面より再上映が望まれている。

長江先生は、昭和三十七年より東洋大学で、書道史、及び書道教育の講座を担当されて居り、いまは、淡江書法の一般化のため努力して居られる。

此度の長江先生個展は、淡江書法による作品の発表で、常識としての「書」の在り方を、世に問われることとなったのである。

以上が、淡江書法の現在までの履歴の概要であるが、資料戦塵に帰し、起稿遺漏なしとは言いがたいので、淡江先生始め、玉江、長江、節子、演生、二代玉江の諸先生とその流れを一にされる方々の御協力を懇望する次第である。そして、広く先考の遺法の恵沢を一般に普及したい念願である。

以上

(昭和三十九年三月二十一日浅見胖蔵記)